

メリトクラシーの比較研究（1）

—日本とシンガポール—

○耳塚寛明	(お茶の水女子大学)	○荻谷剛彦	(東京大学)
○荒川葉	(日本学術振興会)	岩木秀夫	(日本女子大学)
樋田大二郎	(聖心女子大学)	大多和直樹	(東京大学)
金子真理子	(東京学芸大学)	堀健志	(東京大学特任研究員)
Sim Choon Kiat	(東京大学大学院)	中島ゆり	(お茶の水女子大学大学院)

I. はじめに

A. 研究の目的

Merit (=IQ+Effort, すなわち能力+努力) を持った社会成員をエリートの地位へと選抜し、彼らが人々を支配する社会を、meritocracy (メリトクラシー) という。分岐型もしくは単線型の学校系統を整備し、義務教育学校から後期中等学校への移行段階および後期中等学校から高等教育への移行段階において、能力原理にもとづく選抜を徹底させることによって、属性原理的な社会的地位の相続を封ずるとともに、幅広い社会階層的背景から高度人材の選抜を目指すのが、現代福祉国家における meritocracy の祖型である。時代や社会によりその特徴を異にするとはいえ、現代社会はメリトクラシクな選抜原理を規範・イデオロギーとしたバリエーションとして把握可能であり、日本社会も例外ではない。

しかしながら近年、日本社会におけるメリトクラシー規範の揺らぎ、もしくはメリトクラシクな選抜システムそのものの変容が指摘される。たとえば竹内(1995)は、「メリト・イデオロギー」が、一方では豊かな社会の到来によって、他方で「ハプニングの成功観」の台頭によって、揺らぎを見せていると主張する。また私たち研究グループの調査でも(樋田・耳塚・岩木・荻谷編2000)、20年前の高校教育に比べて、高校生文化や進路選択に対するトラッキングの影響力が小さくなり出身階層の影響力が大きくなっていること、メリトクラシー規範が相対的に低い階層出身者から崩れつつあることが見いだされた。

日本の教育システムは、メリトクラシー規範を衰退させ、教育の階層再生産機能を強め、結果として社会的資源配分における鋭い社会階層の分化をもたらす可能性がある。メリトクラシー規範の揺らぎは、①エリート選抜の正統性を脅かし、②選抜からもれた非エリート層の全体社会に対する loyalty を低下させ、③社会的統合と経済的生産性を低下させる危険を有する。

この研究の目的は、タイプの異なる諸外国(シンガポール、イギリス)を比較の鏡とし、後期中等教育レベルに在学する青年の比較を通して、日本の高等学校における選抜の構造と高校生におけるメリトクラシー規範の特徴を明らかにし、その背景を考察するところにある。今回の学会報告ではシンガポール(本報告)およびイギリスとの比較(樋田、堀ほか「メリトクラシーの比較研究(2)」)を行う。

B. 調査の概要

本報告で用いるのは、次の調査の結果である。

1) 日本調査

対象：A 県 B 地区に所在する 12 高等学校の 3 年生 1271 人。12 高等学校は、B 地区の高等学校をほぼ網羅し、学校階層最上位から最下位までをカバーしている。公立 8 校、私立 4 校。

方法：質問紙による集団自計式調査。

時期：2002 年 10 月～12 月。

2) シンガポール調査

対象：3 タイプの中等後教育機関(ジュニア・カレッジ(以下 JC)、ポリテクニク(Poly)、技術教育校(ITE))に 1 年以上在学し、卒業するための受験を控えている最終学年の生徒合計 1288 人。JC371 人、Poly344 人、ITE573 人である。

方法：インターネットにおける Web 調査(JC および ITE)。質問紙による自計式調査(Poly)。

時期：2002 年 8 月～9 月。

データの重みづけ：シンガポールにおける、JC、Poly、ITE への、入学者数の割合(コーホート中)は、それぞれ約 25%、約 40%、約 25%である。得られたケース数は大きく隔たっていたため、上記の比率になるよう重み付けを行った上で、分析した。

C. シンガポールの教育体系 省略

なお、本研究に対して、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究 B、平成 13～15 年度、代表者耳塚寛明)を得た。
(耳塚 寛明)

II. トラッキングとメリトクラシー

A. 問題設定

このセクションでは、日本とシンガポールにおけるトラッキングの効果の観点から、両国における教育選抜の構造とメリトクラシー規範を比較・概観する。はじめに、両国における選抜システムを比較し、その後、①aspiration・進路展望、②学校生活、③機会構造の認識、④社会観の比較を行う。

比較に際して、日本は①普通科上位校、②普通科中位校、③普通科下位校、④専門学科中位校、⑤専門学科下位校に、

シンガポールは①JC トップ校(H-JC)、②JC 下位校(L-JC)、③Poly、④ITE 上位コース(H-ITE)、⑤ITE 下位コース(L-ITE)に区分する。

B. 選抜システムの比較

シンガポールにおける業績競争は、小学校段階からはじまる。第一に、主として言語と数学の修得状況による能力別編成(ストリーミング)は初等教育4年段階からはじまり、第二に初等教育修了試験によっておおまかに3コースの中学校へと分けられる。さらに第三に中等教育卒業時試験(GCE)によってトップ25%(概数)がJCへ、真ん中の40%がPolyへ、下位25%がITEへと振り分けられる。それぞれの教育機関は、卒業生の進路および教育内容と方法の点ではっきりと異なる。中等後教育修了時点で、直接、大学への入学が許されるのは、原則としてJCの卒業生に限られる。

シンガポールの生徒たちは、明確に性格を異にする3タイプのトラックに制度的に分化されて在学している。現在どのタイプのトラックに位置づけられるのかは、①国家的に統一された「試験」(GCE)において(国家的統一試験)、②予め入学に必要な成績が明確に示されており(入学基準の可視性)、③またコーホートにおける入学者の比率が厳格に定められた学校種へと振り分けられる。さらに学校種によって、④教育内容と方法が異なる。⑤卒業後の進路も異なるが、そこでも⑥どれだけの成績を示せばどんな大学・学科へ入学可能か、あるいはどのレベルや収入の職業に就くことができるのか明示的である。⑦中等後教育機関へと振り分けられる選抜以前に、少なくとも2ステップにわたる選抜機会を通り抜けている点も重要である。

日本の高校生も同様に、入学時の学力水準やトラックに分化されて在学している。しかし、トラックへのplacementは、①国家的な試験の成績ではなく県による入試あるいは独自入試(私学)の成績によって行われ、②多様な選抜基準が存在するために入学基準の可視性は必ずしも高くはない。また③各トラックに想定されている卒業後の進路の分化はシンガポールに比べると曖昧である。さらに④普通科=専門学科間には、はっきりとした教育課程の相違があるものの、普通科内部の相違はやはり明示的ではない。⑤高校在学中にどれだけの成績を収めればどんな進路へと進むことができるのかについても、相対的に可視性は低い。⑥高校入試以前に、シンガポールほど制度的・明示的なストリーミングは存在しない。

以上を要するに、日本と比較したとき、シンガポールの選抜システムは、早期から、かつ進路と教育課程の点でclassification(類別)が強く、選抜基準と選抜の帰結に関して可視性の高いものとして特徴づけることができる。

C. 分析

1) 学習行動と学業をめぐる意識

① 学校外での学習時間を全体として見ると、日本は、家

庭で学習しない生徒が多い。家庭での学習時間ゼロは、日本36.6%に対してシンガポール13.0%である。ただし、普通科上位とH-JCを比べると、日本のほうが学習時間が長い。日本では、下位トラックになるに従って、学習時間ゼロが増加し、また平均学習時間も減少する(専門学科下位でまったく勉強しない者の比率は71.5%)。シンガポールでもその傾向があるものの日本より弱く、L-ITEでも学習時間ゼロは19.7%に過ぎない。日本は、学業達成をめぐる努力が局所化している。

② 「授業のおもしろさ」について。おもしろさを感じている生徒の比率はシンガポールが日本を大きく上回る(とても+まあおもしろい、シンガポール64.0%、日本40.0%)。とくに専門学科下位(49.6%)は、L-ITE(78.8%)に比べて授業のおもしろさを与えることに失敗している。

③ 授業の有用性について、数学を例にとり尋ねてみると、「数学は将来役立つ」「思考力を高めるのに役立つ」という回答はシンガポールで顕著に多い(数学は将来役に立つ、シンガポール86.7%、日本34.2%)。学校の授業の中で、「大学教育を受けるための基礎的な学力」「仕事に就くときに、役に立つ知識や技術」がどれだけ身につけているかを評価させると、いずれもシンガポールで身に付いているという回答が多い。将来の生活にとってのレリバンスもシンガポールでより認識されている。論理的に考えたり説明したりする力、科学技術的な知識、経済や政治、社会の仕組みに対する理解についても同様である。日本では、授業の有用性感覚を持ちにくくなっている。ただし、「自分らしく生きる力」についてのみ、日本で身に付いているとする回答がシンガポールを上回る。

④ 成績の自己評価、能力の自己概念についてみると、日本で相対的に下位に自己を位置づける生徒が多い。

⑤ 両親の期待(両親はよい成績をとることを期待している)、先生が勉強やテストが重要であると強調、先生の期待(先生は私がよい成績をとることを期待している)―いずれについても、シンガポールが日本を上回る(先生の期待、シンガポール68.6%、日本36.5%)。とくにL-ITE(74.5%)と専門学科下位(27.1%)との差異が顕著である。ただし普通科上位とH-JCを比べると、勉強やテストが重要だと先生が強調しているという回答は、普通科上位で多い。

⑥ 成績競争の激しさについて、生徒たちはどう受け止めているのか。成績競争が激しいと、より感じている(stiff)のはシンガポールである(クラスでは成績競争が激しい、シンガポール71.3%、日本33.6%)。同時に、シンガポールでは、学校に行くことが苦痛(stressful)だと感じる生徒も相対的に多く(シンガポール56.0%、日本26.9%)、また自分の成績への失望感も大きい。日本では、成績競争の厳しさ等について、トラック間の落差が大きく、ことに専門学科では競争的風土が弱い。これに対して、シンガポールでも同様の傾向があるものの、ITEでも半数以上が競争が激しいと答えている(成績競争が激しい、日本専門学科下位25.4%、シンガポールL-ITE64.9%)。

2) 教育選抜の公平性、透明性、必要性、競争移動規範（敗者復活可能性）の認知

- ① シンガポールの生徒にとって、成績競争が厳しいのと同様、「いまの受験制度は苦痛」だと感じるものが多い（シンガポール 84.0%、日本 61.8%）。
- ② しかしその一方で、いまの受験制度は「公平だ」（シンガポール 67.7%、日本 51.0%）、「優れた人材を見つけ育てるために必要だ」という回答も多い。受験制度の公平性および必要性を、教育選抜に対する正当性認識とすれば、日本よりシンガポールのほうが正当性認識が強いといえる。
- ③ 日本では、下位校の生徒ほど正当性認識が低下するのに対して、シンガポールでは ITE で高いことが特徴である。すなわち、選抜にもれた敗者の正当性認識が日本では低くなっている。
- ④ 「高校受験で失敗しても大学受験で挽回できる」（Education system in Spore offers 2nd chance）と考える生徒は、全体ではあまり変わらない。ただ日本では下位校ほどそう考える生徒が少ないのに対して（普通科上位 64.1%、専門学科下位 43.0%）、シンガポールでは逆に下位校ほど多い（H-JC35.1%、L-ITE84.5%）。「競争移動規範」の強さは全体では変わらないが、シンガポールでは選抜の敗者こそが強く持っている。

3) 社会観、メリトクラシー認識

- ① 「〇〇では社会や学校での競争のしくみが公平で分かりやすい」と答えた生徒は（とても+まあそう思う）、日本 23.7%、シンガポール 63.8%。学校階層による相違は両国ともほとんどない。
- ② 「お金持ちと貧しい人の差が大きい」は、日本 75.2%、シンガポール 68.0%とわずかに日本で高い。「どんな家に生まれたかに関係なくいい職業につくチャンスがある」は日本 61.1%に対してシンガポール 75.7%である。また「実際にいい仕事についている人の割合には、生まれによる違いはない」は、日本 45.5%、シンガポール 69.6%である。結果としての不平等認識は日本でやや大きく、機会の平等認識はシンガポールで大きい。
- ③ 選抜と競争の「公平性」「透明性」、機会の「平等性」は、日本よりもシンガポールで強く認識されている。

D. 小まとめ

- ① 日本の高校生に比べてシンガポールの生徒の教育的・職業的アスピレーションは、総じて高い。とくに、下位トラックにおいて高いアスピレーションが維持され、敗者復活機会の開放性など競争移動規範が保持されている。日本と比べて、早期からのかつ類別の強い選抜システムでありながらこの状況が生まれているのは、大学、Poly への編入学機会が開かれている等上昇移動ルートが可視的に残されていること（それを可能とする奨学金制度も充実している）、また ITE の学校内でアスピレーションを鼓舞・加熱し続けるシステムが存在することに由来すると考えられる。

- ② 学習時間に代表される学習へのコミットメントは、シンガポールで強く、しかも下位トラックでもなお保持されている。それを可能としているのは、学習のおもしろさや、将来的・職業的等の有用性の感覚である。授業・学習の有用性について、日本の高校生が上回っているのは「自分らしく生きる力」が身に付いているかどうかだけである。勉強やテストの意義を先生が強調している（学業重視風土）という回答はシンガポールで多く、またよい成績をとることを先生や両親が期待している（学業達成期待）についても同様である。日本の高校、とりわけ中位・下位トラックでは、学習の意義や有用性を生徒たちに認識させ、動機づけることに失敗している。
- ③ 社会や学校における競争の仕組みについて、「公平性」「透明性」「可視性」「必要性」の認識はいずれもシンガポールで強い。日本では、選抜・競争の正当性認識が、下位トラックで弱まるのに対して、シンガポールでは下位トラックでも保持されている。この背景には、受験や競争を否定する言説の浸透や、また実際に多様な選抜基準の設定が著しく進展し、選抜基準の厳格さや透明性・可視性が失われてきたことが影響していると考えられる。（耳塚 寛明）

III. 競争への加熱と冷却・移動・社会階層

A. 問題設定

本節では、日本とシンガポールという教育システムの異なる国で、生徒はどのような選抜を経験して在籍する後期中等教育機関に配分されたのか、解明することを試みる。

すでに前節で触れたように、シンガポールでは、どの後期中等教育機関に在籍するかで、その後の進路や地位達成が大きく規定される。大学に直接入学が許されるのは、原則として JC の生徒のみであるし、最終教育機関は職業達成や給料にも直接影響してくる（詳しくは Sim Choon Kiat 2003）。また、日本についても、中位校・下位校では高校の学科・ランクと進路の間のリジッドな対応関係は崩れてきているものの、上位校については「いい大学」を目指す志向が維持されていることは先行研究が指摘している。このように、どの高校・後期中等教育機関に入学するかは、その後の進路に明確な差違をもたらすといえる。

それでは、教育達成・地位達成にとって重要な意味を持つ高校段階までの教育システムの中で、いつ、どのような選抜・配分が行われているのだろうか。学歴主義を貫徹し小学校から能力別学級に分けて学習させるシンガポールと、もともとトラックへの分化は高校まで遅延されており、その分化さえも近年、一元的な学力に基づく選抜から生徒の選択によるものに変化させようとしてきた日本では、学歴獲得競争への参加のさせ方や分化の時期・方法に、違いが見られる可能性がある。

本節では、小学校 6 年時、中学校 3 年時と現在の学校生活や成績を尋ねた質問から、①成績競争の参加圧力、②移動の時期と開放性、③社会階層の関わりが、日本とシンガポールでどのように異なっているか、解明することを試み

る。この際、日本では実質高校までは学力によるグループ分けはないのだが、シンガポールのストリーミングとの比較の観点から便宜的に、小、中学校のそれぞれについて成績に基づくトラック（上位＝自己申告7点尺度中1、2、中位＝3、4、5、下位＝6、7）を作成し、ある時期にある成績（トラック）におかれることが、学習行動やその後の移動、教育達成にどのような影響をもたらすのか操作的に比較検討できるようにした。なお、比較の際のわかりやすさから、シンガポールの後期中等教育については以後、高校と表記した。

B. 分析

1) 競争への参加圧力—小～中～高

まず、日本とシンガポールで、成績競争への参加圧力がどのように異なっているか、小学校、中学校、高校のそれぞれについてみた。その結果、シンガポールでは、小学校から高校まで、一貫して、成績競争に向けて強くまんべんなく加圧されていることがわかった。「クラスでは成績競争が激しかった」に対し、小学校では全体として約6割、中学校では約6割、高校では約7割の生徒が肯定的に回答していた。しかも所属するトラック（小学校＝EM1、EM2、EM3 / 中学校＝Special、Express、Normal-academic、Normal-tech / 高校＝H-JC、L-JC、Polytech、H-ITE、L-ITE）による回答差はほぼ見られなかった。一方日本で、同設問への肯定的な回答は、小学校では1割弱、中学校で3割半、高校で3割半となっている。小学校では、成績競争に向けてほとんど加圧されず、中学校では加圧されるものの、シンガポールに比べると低い水準に止まっている。さらに、日本では高校段階になると、トラックによって成績競争への加圧のされ方は大きく分化する。普通科上位校のみが約7割肯定的に回答し、次に高い普通科中位校でも3割にとどまる。同様の傾向は、「先生は、勉強やテストが重要だと強調していた」にも見られる。

2) 勉強時間—小～中～高

こうした、競争への参加圧力の差は勉強時間にも反映しているといえる。シンガポールは、小・中・高ともに、日本よりも総じて勉強時間が長く、しかもトラックによる差違も小さかった。すべてのトラックの生徒をまんべんなく勉強させているといえる。これに対し、日本はまず小学校では、いずれの成績グループの生徒も勉強時間が極めて少ない。中学校になるとやや全体量は増えるものの、成績上位グループの生徒と、成績下位グループとで、勉強時間が分化するようになる。高校ではシンガポールのJC以上に勉強する普通科上位校とほとんどしない普通科下位、専門学科と大きく2極分化する。

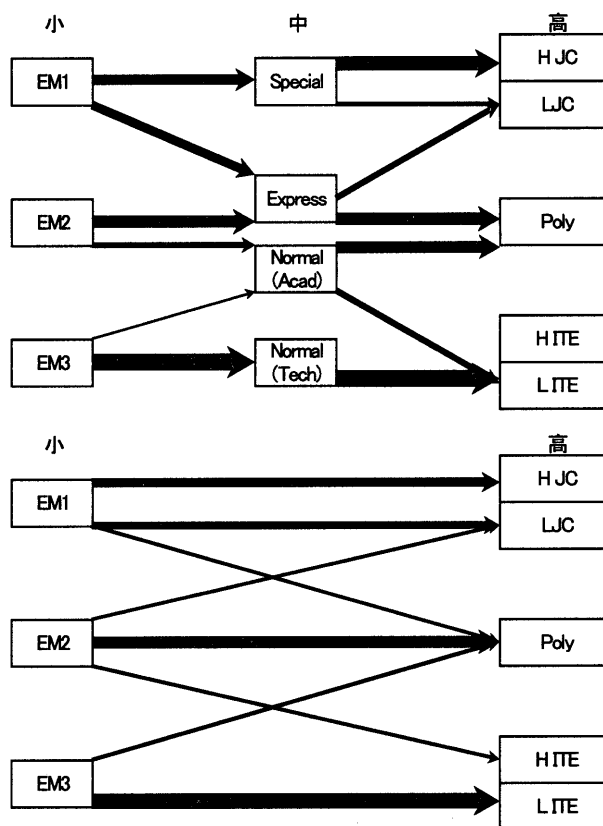
3) トラックの移動—小～中～高

それでは、こうした競争への意識や実際の学習行動は、トラック間の移動にどのように反映されているだろうか。

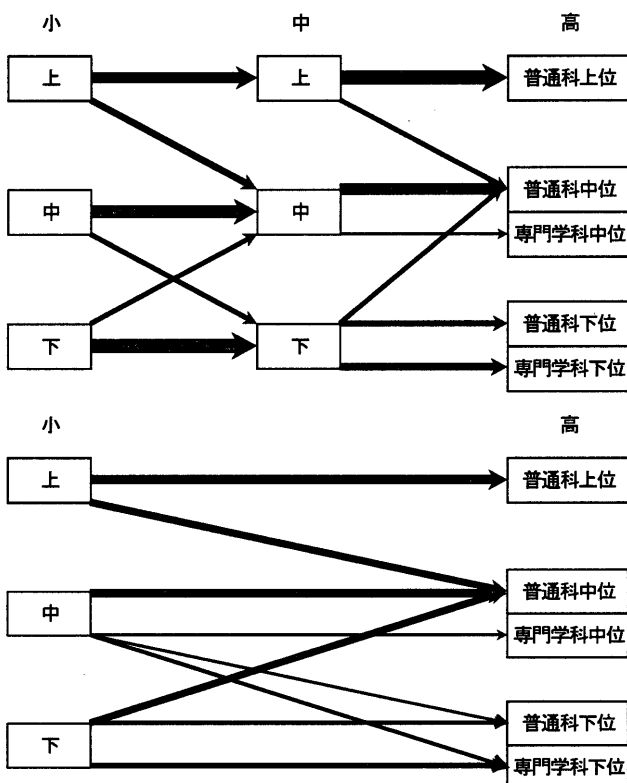
小学校—中学校—高校でどれだけトラック間の移動があるか、比較分析を行った（日本の場合、成績トラック）。その結果、図1の移動パターンが検出された。

図1 トラック間の移動

<シンガポール>



<日本>



日本とシンガポールを比較すると、シンガポールのほうが、トラックの固定性は高い。小学校時のストリームと入学する高校がほぼ対応している。シンガポールにおいてはどの小学校トラック、中学校トラックでも一様に勉強していたが、必ずしもトラックの移動にはつながっていないといえる。一方、日本についても、シンガポールほどではないが、成績上位／上位校については固定的な移動パターンが見出された。

4) 社会階層とトラック—小～中～高

このようなトラック間での移動パターンの開放性の違いが、生徒の属性的要因（出身家庭の社会階層等）による学校教育内での移動のパターンにどのような影響をおよぼしているかが問題になる。そこで属性的要因によってトラックへの割当てや移動にどのような特徴がみられるか、分析を行った。その結果、日本と比較するかぎり、シンガポールは小学校段階でのトラックへの割当てに対する属性的要因の影響が大きく、トラック間の流動性が低いことを反映してか、小学校でのトラックが決まってしまうと、その後は属性的要因の影響はあまり見られなくなることが明らかになった。これに対し、日本ではシンガポールほどは強くはないものの小学校時点から、トラックの割当てに属性的要因が影響を及ぼし、中学校、高校と段階が上がるにつれその影響力が高まることになった。

以上の分析は、教育システムと社会的要因の影響の頭れ方の関係を考察するものであり、今後さらに冷却・加熱の質的な違いを考慮に入れながら、社会的公正としてどのようなバランスが必要なのか、考察する必要性が提起された。（荒川 葉）

IV. 社会階層と国家とメリトクラシー

A. 問題設定

このセクションでは、社会階層、国家・社会への関わりに関する意識、メリトクラシーを正当化する意識といった要因を新たに加え、分析を行っていく。とくに焦点を当てるのは、メリトクラシーにおけるメリットの構成要素の一つである「努力」への影響である。ここでは、先行研究の知見に基づき（荻谷 2000）、学校外での学習時間を努力の指標と見なし分析を進める。

メリトクラシーとは、出身階層の直接的な影響によるのではなく、メリットに基づき社会的・経済的地位が決定する社会の仕組みを指す。しかし、ヤング（1958）の寓話が含まれていたように、出身階層がメリットに及ぼす影響がゼロになるわけではない。メリットを構成すると想定される「能力」においても「努力」においても、それぞれが出身階層の影響を受ける可能性は除去されていない。

日本において、すでに努力に階層差があること、しかもそれが近年拡大していることはすでに別のところで明らかにした（荻谷 2000、2001）。ここでは、今回の調査データを用いて、こうした努力の階層差が他の社会（シンガポー

ル）にも当てはまるものかどうかを検証する。と同時に、メリトクラシー規範の弛緩が日本で生じているとしたら、それがどのような要因に求められるのかを、若者たちの国家・社会への関わりに関する意識に着目することによって解明する。

B. 分析

1) 学習時間（努力）の分析

はじめに、出身階層によって学校外での学習時間（＝努力の指標）がどれだけ影響を受けているのかについて、日本とシンガポールの比較を行った。表は省略するが、1日平均の学校外での学習時間を従属変数に、性別、学校ランク、出身階層グループといった要因を独立変数とした重回帰分析を行うと、日本では、高校ランクを統制した上でも階層グループが学習時間に統計的に有意でなおかつ大きな影響を及ぼしていた（階層上位と他との差が有意）。それに対し、シンガポールでは、階層グループの直接的な効果は有意でない。つまり、日本では、高校ランクを統制した後も、出身階層によって学習時間に大きな差が見られるのに対し、シンガポールではそのような階層の影響がほとんど見られないのである（学校ランクを除いた分析をした場合でも、学習時間の階層差は日本の方がはるかに大きい）。ここから、学習時間を指標とした場合の努力の階層差という現象が、どの社会にも当てはまるわけではないことが明らかとなった。

2) メリトクラシーの正当化と国家・社会への貢献

つぎに、新たに二つの変数を導入した。一つは、メリトクラシーを正当化する意識である。「生徒を学力別に分ける高校受験は必要だ」「今の受験制度は公平だ」「受験制度はすぐれた人材を見つけて育てていくために必要だ」「高校受験で失敗しても大学受験で挽回できる」といった意見への賛否の回答（強く肯定するほど得点の高い4点法）に主成分分析の手法を用いて適用し、「メリトクラシーの正当化意識」尺度を構成した。メリトクラシーを正当化する意識を持っているほど、メリトクラティックな規範に従い、「努力」を産出するという仮説を設定できるからである。

もう一つの新たな要因は、国家・社会への貢献に関する意識である。ここでは、「社会の一員として日本（シンガポール）をもっと暮らしやすくしたい」「国や社会のリーダーになりたい」「経済発展に貢献することは国民の義務である」「人を助けるボランティア活動をしたい」「将来、自分は社会の役に立つと思う」といった意見への賛否（強く肯定するほど得点の高い4点法）に主成分分析を適用し、「国家・社会への貢献度意識」の尺度を構成した。ここでは、社会的貢献意識を強く持つほど、努力の産出が大きくなるという仮説を設定した。

これらの変数を加えて、学習時間を従属変数にした重回帰分析を行った。

学校外での学習時間を規定する要因(重回帰分析)

	日本		シンガポール	
	非標準化係数	標準化係数	非標準化係数	標準化係数
(定数)	77.825		105.647	
男子ダミー	6.202	0.031	-20.971	-0.105
階層下位G	-1.566	-0.007	4.515	0.021
階層上位G	24.956	0.106	0.077	0.000
普通科上位(JC)	99.608	0.380	48.373	0.219
専門校(ITE)	-62.042	-0.276	-6.960	-0.031
国家・社会貢献	9.878	0.099	7.956	0.080
メリトクラシー正当化	6.663	0.067	2.967	0.030

従属変数: 学習時間

N=1237, 自由度=7, F=89.943, sig=.000,
AdjRSquire=.335N=1210, 自由度=7, F=13.608, sig=.000,
AdjRSquire=.068

その結果、①日本では、階層上位であることが学習時間に強い影響をもつ、②学校ランクの影響は日本のほうが強い、③国家・社会への貢献意識については両国ともに正の影響をもつ、④メリトクラシーの

正当化意識については日本でのみ有意な影響をもつことが明らかとなった。全般的に日本の高校生のほうがメリトクラシーの正当化意識は低い、その影響力は日本のほうが大きいのである。

3) メリトクラシーを正当化する意識と国家・社会への貢献意識

「メリトクラシーを正当化する意識」を規定する要因(重回帰分析)

	日本		シンガポール	
	非標準化係数	標準化係数	非標準化係数	標準化係数
(定数)	-0.107	*	0.023	
男子ダミー	0.052	0.026	0.006	0.003
階層下位G	0.074	0.031	-0.059	-0.027
階層上位G	0.108	0.046	-0.081	-0.037
普通科上位(JC)	0.380	0.145	-0.297	-0.133
専門校(ITE)	-0.123	-0.054	0.347	0.155
国家・社会貢献	0.157	0.157	0.238	0.238

N=1246, 自由度=6, F=12.374, sig=.000,
AdjRSquire=.052N=1213, 自由度=6, F=29.619, sig=.000
AdjRSquire=.124

両国で影響力に差の見られたメリトクラシーの正当化意識を従属変数に重回帰分析を行った。その結果、①日本では普通科上位校ほど正当化意識が強くなるのに対し、シンガポールではJCのほうが正当化意識は弱く、ITE 生徒の意識が強い、といった逆転現象が見られた。②国家・社会への貢献意識の影響は、シンガポールのほうがやや強い。

表は省略するが、国家・社会への貢献意識を従属変数に重回帰分析を行った結果、①日本では普通科上位校ほど貢献意識が有意に低くなるのに対し、シンガポールではJCと並んでITEの生徒の貢献意識が高い、といった異なる関連が見いだされた。また、②日本では階層上位グループほど貢献意識が強いがシンガポールには階層差は見られない。③メリトクラシーの正当化意識の影響はシンガポールのほうがやや強いことがわかった。

以上より、シンガポールでは、学校ランクの低位に位置するITEの生徒でこれらの意識が強まるのに対し、日本では、国家・社会への貢献については普通科上位校ほど意識が弱くなり、メリトクラシーの

正当化意識では上位校ほど強いといったねじれた関係を見いだせた。シンガポールに比べ、メリトクラシーの正当化意識も国家・社会への貢献意識も日本の高校生のほうが弱い。しかもメリトクラシーの正当化意識を持たないことが努力の産出を抑える影響力は日本のほうが大きい。また、努力の産出に影響を及ぼす国家・社会への貢献意識は、日本では階層上位グループほど強く、中位・下位グループで弱くなるといった階層差が見られる。シンガポールに比べ、日本では、メリトクラシー規範の希薄化や国家・社会への貢献意識の低下といったことが、努力の産出に影響を及ぼしており、それが努力における階層差と関係している可能性が示唆されたのである。

(荻谷 剛彦)

※参考文献・図表の詳細は省略し、報告資料に添付する。